校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

令和３年度卒業証書授与式式辞（抜粋）

令和４年３月７日に行った卒業証書授与式で下記のような「はなむけの言葉」を卒業生に贈りました。コロナ禍の２年間、人が人として生きることの意味を考え続けた日々でした。３月２５日の修了式でも、１・２年生に同じ内容を伝えようと思っています。

人間は誰でも「他の人より優位に立っているという優越感に喜びを感じる」、「自分より弱い者がいることで安心する」など、いじめにつながる人間性を内包していることを否定することはできません。つまり、いじめの根っこは自分の内にも潜んでいるのです。いじめについて考えたり、いじめに対して何らかの手をうとうとしたりする時、その出発点はここにあります。いじめの根は、自分の内にもあるということです。私たちは、それをいかにして芽吹かせないようにするかを問われています。それ故に、私たちは四つの校風「協・優・敬・恕」を定め、弱い心を芽吹かせない学校風土を築こうと、継続的に取り組んできました。

校風の一つ目、協力の「協」、

一人一人が互いの力を寄せ合って助け合うことです。集団で生活していくとき、不安はつきもの、助けを求めることは恥ずかしいことではありません。「つらい」ときには、誰かに相談したり、助けを求めたりするのは当たり前のことです。また、困っている人がいたら相談にのったり助けたりするのも当たり前のことです。君たちが学校生活の中で日々実践してきた小集団の学び合いはこの最たる姿です。

二つ目の校風、優しさの「優」、

人の憂いがわかることです。目に見えている部分から他人のことを決めつけるのでなく、表に出ている言葉と行動は、本当の気持ちと必ずしも一致しないこと、その人はその人なりにいろいろな背景があってそうなっていることを想像して、その人の言動を注意深く見聴きすることができる。こういう人が本当に優しい人、本当に思いやりのある人です。そんな人が親友であってくれたなら、それはこの上なく幸せなことです。

三つめの校風、尊敬の「敬」、

誰かを軽んじたり無視したり、ぞんざいに扱ったりせず価値のあるものだと認めて大切にする心です。この心がない人は、相手を尊重せず、自分の意見を人に押し付け、上から見下そうとする心の動きが生じます。相手を自分と同じように大切にすることは、とても気高く尊いことです。道徳で学んだ「リスペクト・アザース」、人間関係を円滑に保つための根本となる考え方です。

そして、四つ目の校風、「恕」、

卒業アルバムの表紙にも載せました。「ゆるす」ことです。「恕」のゆるすは「受け入れること」です。私たちの社会は「違う」ということが前提です。つまり、違いを超えて受け入れ合うことが大切です。そのためには、少なくとも、みんなが心を開いておき、誰もが広い心でみんなを受け入れようとする寛容さが必要です。相手を善と認めなくても、好きにならなくてもかまいません。人を傷つけない、人権を守るという最低限の礼節さえ持っていれば、誰とでも広い心で共存はできるのです。

このように考えると、四つの校風は、私たちが大人として社会生活を営んでいく上でも大切な心の在り方だと気付かされます。

この二年間、みなさんはＨＥＲＯプロジェクトを通して、四つの校風を視点に「どんな自分でありたいか」を自分自身に問い続けてきました。そのことで培った心をこの先も大きく育て続けてください。それが周りの人々を幸せにし、あなた自身の幸せにもつながります。